

個人コレクションの多面性 A Versatile Library: The CHSSL's "Private" Collections

齋藤 修
SAITO Osamu

歴代センター長の後を継いで、昨年12月1日より社会科学古典資料センター長に就任いたしました。今年の1月には、センター内の工房と書庫をみせていただく機会をつくっていただき、大きな感銘を受けました。センターが所蔵している古典資料の価値の高さ、他機関にはないユニークな保存修復工房の仕事、着実な講習会や目録づくりの努力等々に、であります。非常に乏しい予算の制約内でこれらの業務に取り組んでおられるセンター所属教授、助手、職員の方々には深く感謝いたしたいと思います。

本センターは個人文庫が主体です。経済学分野では世界的に有名な Goldsmiths' Library や Kress Collection もそうですが、過去の学者や愛書家が集めた書籍コレクションが中核となったライブラリだからです。そのなかでも本センターの特徴は、複数の重要な個人文庫を収蔵しているところにあるといつてよいでしょうか。

そのために、あるいはまた収蔵資料が1850年以前のもを主としているためでしょうか、センターは社会科学諸分野の学説史ないしは思想史のための資料館というイメージがあるようです。正直なところ、私自身も漠然とそのように思っておりました。メンガー文庫はオーストリア学派創始者の一人であった経済学者の個人コレクション、ギールケ文庫はドイツの法学者の個人コレクションですから、当然、オーストリア学派成立史とか、ドイツ歴史法学派の展開といったことを研究するひとつにとって宝庫であることは間違いありません。昨年暮にはメンガーに関する国際シンポジウムが開かれましたが、そこでの目玉は『国民経済学原理』初版の手沢本書入れの丹念な解説と分析であったと伺っています。所蔵者が残した書込みの分析ができるというのはその学者の思索の過程を追うことを可能としてくれますし、また版を重ね、内容的にも改訂を重ねた著書の場合は、さまざまな版の書誌学的な突合せも主要なテーマとなるでしょう。これらは、まさに個人文庫でなければ難しい研究です。センターの書架をみますと西洋思想史上の古典には事欠きませんし、個人文庫に収められたそれら古典の周辺文献の豊かさを考えると、センターがそのようなタイプの学説史研究の中核拠点としての役割を今後も担ってゆくであろうことは疑う余地がありません。

ただ、今回書庫を案内していただいたときにメンガー文庫の書架を一通りみて、おやと思いました。意外と経済理論以外の分野の書籍が多いのです。たとえば統計の書架。メンガーの時代に出たオーストリアやドイツの統計年鑑がたまたまあるだけというのではなく、外国のものが少なからずあります。明らかに意識して収集したのだと思いました。19世紀の統計書は、いまでは経済史家にとっての資料です。とすると、メンガー文庫は、メンガー研究者とは違った視点から研究している歴史家にも役立つ文献が少なからずあるのではないかと。そう思ったのです。

そこで、自分の研究室に戻ってから OPAC で調べてみました。私の専門は経済史と歴史人口学ですので、歴史的時代の国民所得を推計するといった研究分野に必要な統計数値情報を含

んだ文献と、ミクロ・レベルのデータ分析から人びとや家計の行動様式を調べるという分野に適した文献とをいくつか検索してみたのです。そして、その検索結果をみて、すごいと思いました。

18世紀英国の国民所得資料については、データはほとんどありません。19世紀にはその名も『国民所得』というタイトルの、1867年についての推計結果がDudley Baxterによって公刊されていますが(*National Income: The United Kingdom*, 1868)、それより前ですと、1800年ころのPatrick Colquhounの書物と、1759年についてのJoseph Massieの資料、そして1688年にかんするGregory Kingの統計表しかありません。Kingのものは20世紀になって、ファクシミリ版や校訂された著作が出版されていますので探すのは容易ですが、それ以外は、わが国ではなかなかみられないものでしょう。ところが、メンガー文庫にはすべてが揃っているのです。BaxterもColquhounもMassieもなのです(Colquhounは5点、Massieは6点を数えます)。

同じころの、ミクロ・レベルの経済分析を志す歴史家には、異なった種類の資料が必要となります。統計屋が個票データと呼ぶ、個人や家計を単位とした、まとまった数の数量情報からなる資料群ですが、このようなデータも歴史では稀です。この稀な資料のなかで出色のものといえば、Sir Frederic Morton Eden, *The State of the Poor* (1797)でしょう。イングランド各地から134事例が集められて、それぞれが600ページになる3冊本に収められています。消費や生活水準の研究には格好の資料ですが、それ以外でも、たとえば労働の分析にも使えるデータです。私自身、ずいぶん前のことですが、留学中に、この3冊本からデータをカードにとって家族の労働供給の分析をやったことを思い出します。この本をOPACで検索したところ、やはりありました。それだけではありません。Frédéric Le Playの*Les ouvriers européens* と呼ばれている、しかし個々の巻のタイトルはそれぞれ別の6巻本(1877-79)も、メンガーは所蔵していました。直系家族の「発見」者として知られているこの社会学者の浩瀚な書物は、ヨーロッパ各地の家族の似たような情報が集められていて、家族構造の研究はもとより経済的な分析のデータとしても使えるマイクロデータの宝庫です。このように、マクロとミクロ両分野の数量経済史における基本資料がこんなに揃っているとは考えもしなかったことでした。メンガー文庫は、実証的な歴史家にも役立つコレクションだと認識を新たにしました。

しかしメンガー文庫についていえば、その内容の多様性は何もいまわかったことではありません。たとえば10年以上も前に、中村喜和名誉教授が「探検家」カール・メンガー」という一文を『センター年報』第10号(1990年)に寄せていて、「メンガー文庫は謎めている」、「メンガー文庫の最大の謎は旅行記のおびただしさである」と書かれているのです。中村先生は、メンガーは「紙の上の秘境探検家」になりたかったのではないかといっておられますが、収集の動機はともかく、この千点近くある旅行記を資料として使うのも悪くないと思います。歴史民族学の領域のひとつならでるのではないのでしょうか。

実際、センターの個人文庫の内容は多彩です。といっても、センターのもう一つの核であるフランクリン文庫のように、メンガーやギールケという偉大な学者とは性格の異なる個人が収集したコレクションが多様な資料からなっていることは想像がつかますが、学説史上の巨人の文庫でも内容が多面性に富んでいる場合があるということは強調してよいことだと思います。

個人コレクションというものは本質的に versatile なのではないのでしょうか。丹念にみてゆけば、もっと面白いアングルがいくらかでも見つかるような気がします。センター資料が、学説史家はもとより、他の分野の実証的な歴史研究者によっても頻繁に利用されるようになることを私は期待しております。

(社会科学古典資料センター長、経済研究所教授)